

カキの接ぎ木伝染性病害の発生について

草野成夫・下村克己 (福岡県農業総合試験場果樹苗木分場)

Nario KUSANO and Katsumi SHIMOMURA :
Occurrence of a Graft-Transmissible Disease of Kaki

1989年に福岡県浮羽郡浮羽町の柿園の‘伊豆’で、新梢に炭そ病に類似したえそ斑点を生じている樹が発見された。その症状は、新梢が登熟すると一時的に判別しにくくなるが、2年生枝以上の枝では枝梢基部の皮層を中心にき裂が認められた。また、同一圃場の‘富有’1樹に新梢がえそ斑点を示すものもあった。しかし、2年生枝以上の症状は明確ではなかった。なお、現地圃場における発生状況は第1図に示しているが、特に、1樹の症状が激しく、樹冠容積も他の樹に比べてやや小さかった。カキの接ぎ木伝染性病害については、1992年柳瀬らによりわが国ではじめて発表されたが、その病原体はまだ明らかにされていない¹⁾。

そこで、病原体由来か否かを確認するため、接ぎ木伝染性の試験を実施した。

1. 材料及び方法

1990年に無加温網室において花柿実生にえそ斑点症状を示す‘伊豆’を接ぎ木接種した。1992年には健全な‘西村早生’‘伊豆’‘松本早生富有’‘富有’の1年生苗木に上記症状を示す‘伊豆’の穂木を接ぎ木した。

また、現地で発症している樹及び健全な樹から果実を採集し調査を行った。

2. 結果及び考察

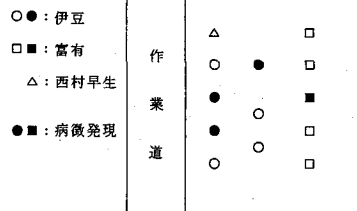
台木に使用される花柿の実生では、接ぎ木接種後3か年経ても病徴は発現しなかった。しかし、健全な栽培品種の‘西村早生’‘伊豆’‘松本早生富有’及び‘富有’の苗木に接ぎ木接種したところ、接ぎ木後2年目の春に接種した‘伊豆’すべてと‘松本早生富有’の6本中1本に上記症状が再現された。特に、‘伊豆’では新梢に炭そ病類似のえそ斑点と枝梢基部の粗皮、き裂が観察された。このことから、これらの症状は接ぎ木伝染することが明らかになった。カキ産地での聞き取り調査によると、類似の症状が散見されるものの、本接ぎ木病害と同一かは今のところ不明である。

また、単年度の果実品質調査では明確な相違はなく、継続的な調査が必要と考えられる。

従来、柳瀬らが‘西村早生’で発生を認めたカキわい化病は、本病害の症状が異なること及び接種した‘西村早生’にまだ病徴が発現していないことから、別の病害と考えられた。今後は、接ぎ木伝染している病原体の検出及び特定が必要である。

引用文献

- 1) 柳瀬春夫・梅木清作・糸 喜幸・三枝三一：日植病報 58, 618-619, 1992.



第1図 カキ圃場の概要

第1表 保毒穂木接種後の病徴発現 (1994.5.1)

品 種	供試個体ナンバ－						Cont.
	No.1 CB	No.2 CB	No.3 N	No.4 CB	No.5 N	No.6 CB	
伊 豆	+	+	+	+			- -
西村早生	-	-	-	-	-	-	- -
富 有	-	-	-	-	-	-	- -
松本早生	-	-	-	±	+	±	- -

注) a) 接種: 1992年2月, b) CB: 冬枝基部の粗皮, き裂
c) N: 新梢の黒色斑点
d) 接種穂木の状況: a...枯死, b...伸長後枯死, c...伸長中



写真1 炭そ病類似のえそ斑点



写真2 接ぎ木接種により発現した枝の粗皮, き裂症状